第28回東海小児整形外科懇話会

当番幹事：星野裕信(浜松医科大学整形外科)
日　　時：2013年2月9日(土)14：00〜18：00
場　　所：大正製薬(株)名古屋支店　8階ホール

一般演題1　座長：鬼頭浩史

1．先天性肩甲骨高位症(Sprengel変形)に対する肩甲骨下降術の1例

名古屋市立大学整形外科
○伊藤錦哉・和田郁雄・若林健二郎
村上里奈・服部一希・大塚隆信

症例は3歳女児．出生直後より頚部周囲の形態的異常を指摘されていた．当院初診時，左肩甲骨高位，左肩関節の外転および肩挙制限を認めた．CT画像上，肩甲頚椎骨を認めた．左先天性肩甲骨高位症，Cavendish分類grade 3と診断．肩甲骨下降術を施行し，術後は2週間のVelpeau包帯固定を行った．先天性肩甲骨高位症は比較的稀な疾患で，重度例には美容的，機能的障害を来す．若干の文献的考察を入れ報告する．

2．乳児期に確定診断に至ったMesomelic dysplasia Robinow typeの1例

名古屋大学整形外科
○松下雅樹・鬼頭浩史・金子浩史
三島健一・石黒直樹

Mesomelic dysplasiaは中間肢節短縮型低身長を呈する骨系統疾患群であり，9種類のtypeが知られている．まれな疾患であることに加え，type間で共通する症状があることから鑑別がしばしば困難である．今回我々は，中間肢節短縮型低身長に加え，特有な顔貌，奇形椎，短指症があることよりRobinow typeを疑い，WNT5Aのレセプターである*ROR2*の遺伝子解析により乳児期に確定診断に至った1例を経験したので報告する．

3．進行性骨化性線維異形成症における骨格変形

名古屋大学整形外科
○三島健一・鬼頭浩史・金子浩史
松下雅樹・石黒直樹

進行性骨化性線維異形成症(FOP)は筋肉を中心とした軟部組織に進行性の異所性骨化を生じる難病で，特徴的な母趾変形が早期診断の決め手とされている．しかし我々は，母趾以外にも様々な骨格変形を認めることを報告した(JBJB-Am, 2011)．FOPにおけるX線学的な診断基準を作成するために，手や頚椎におけるX線所見を検討した．

4．Metaphysealchondrodysplasia(Schmid)の下肢変形に対する長期治療経験

あいち小児保健医療総合センター整形外科
○長谷川　幸・服部　義・岩田浩志
北小路隆彦

初診時3歳11か月男児　7歳1か月両内反股に対して創外固定器による両側同時股関節外反矯正と骨延長，10歳5か月両外反膝に対して両大腿骨遠位内側骨端線にステープルによる成長抑制手術を行い，13歳1か月まで経過観察している1例を経験したので報告する．

一般演題2　座長：星野裕信

5．思春期に軽微な外傷で生じた環軸椎回旋位固定の1例

東栄町国民健康保険東栄病院整形外科　○神谷庸成

環軸椎回旋位固定(AARF)は軽微な外傷や上気道感染などを契機に有痛性斜頚を生じる疾患である．好発年齢は小児期から学童期で，その他の年齢では稀である．思春期に軽微な外傷によりAARFを生じた症例を経験したため，報告する．症例は14歳男児．テニスボールが後頚部にあたってから頚部痛，可動域制限が出現．画像所見よりAARFと診断，保存的治療で軽快した．思春期でもAARFが発症し得る事を念頭に置くべきである．

6．小児股関節痛に対して股関節鏡を施行した3例

浜松医科大学
○古橋弘基・星野裕信・森本祥隆
古橋亮典

小児股関節痛の原因について関節炎，DDH，ペルテス病，腫瘍性病変，感染などが挙げられ，診断に難渋することがある．身体所見および画像・検査所見での診断に難渋し股関節鏡を用いて精査・加療(滑膜切除骨棘・腫瘍切除)を行った3例(症例1：9歳男児　臼蓋形成不全および臼蓋骨腫瘍疑い，症例2：11歳女児　遺残性亜脱臼に伴う変形性股関節症および感染・炎症性疾患疑い，症例3：11歳男児　股関節唇損傷)について報告する．

7．早期乳児てんかん性脳症後のWest症候群に合併した右股関節脱臼の1例

国立病院機構三重病院整形外科
○西山正紀・山田総平
三重県立草の実リハビリテーションセンター整形外科
中野祥子・西村淑子・浦和真佐夫
二井英二

日齢40日で早期乳児てんかん性脳症を発症し，生後5か月時に右股関節亜脱臼を認め，生後7か月時にWest症候群に移行した．右股関節脱臼は進行し，保存療法に抵抗性で3歳4か月時に観血的に整復した．術後経過は良好で若干の考察を加えて報告する．

8．大腿骨近位骨切り術におけるLCP Pediatric Hip Plateの使用経験

浜松医科大学整形外科
○古橋亮典・星野裕信・森本祥隆
松山幸弘

大腿骨近位骨切り術に使用する固定材としてLCP Pediatric Hip Plateを使用した報告はまだ少ない．今回，当教室にてLCP Pediatric Hip Plateを使用した3例について検討した．対象はダウン症における股関節脱臼1例，化膿性股関節炎1例，遺残性亜脱臼1例であった．全例内反骨切り術を施行し，骨癒合を得た．各症例について検討した．

9．乳幼児期の化膿性膝関節炎後の骨端線損傷に対し骨性架橋切除，遊離脂肪体移植術を行った2例

静岡県立こども病院整形外科
○田中紗代・滝川一晴・矢吹さゆみ
松岡夏子

乳幼児期の化膿性膝関節炎(以下関節炎)後の骨端線損傷による変形に対し，骨性架橋切除，遊離脂肪移植術(Langenskiöld法，以下L法)を行った．症例1：8か月時の右関節炎後，外反変形を生じ6歳でL法を実施．術後，変形の増悪を予防できた．症例2：生後4日に生じた左関節炎治療後の内反変形に対し1歳でL法と脛骨粗面下矯正骨切り術を行った．術後，変形の再発や脚長差はない．小児期関節炎に伴う角状変形の矯正治療につき検討した．

一般演題3　　座長：古橋亮典

10．右大腿骨遠位BCG骨髄炎の1例

名古屋大学整形外科
○金子浩史・鬼頭浩史・三島健一
松下雅樹・石黒直樹

BCGは生ワクチンのため弱毒性結核菌が体内に定着する可能性がある．症例は1歳1か月男児．生後12か月より右下肢の運動不良が出現し，徐々に右膝が腫脹した．他院にて化膿性膝関節炎と診断されカルバペネム系抗生物質を投与されたが改善せず，当院へ転院した．MRIにて右大腿骨遠位の輝度変化を認め，骨髄炎を疑い切開生検を行った．培養とPCRの結果からBCGによる骨髄炎と診断した．抗結核剤による化学療法を行い，症状は軽快している．

11．関節痛にて整形外科を受診し若年性特発性関節炎(JIA)と診断しえた2例

菊川市立総合病院整形外科　○山下大輔
浜松医科大学整形外科　星野裕信

若年性特発性関節炎(以下JIA)は16歳より前に発症し，少なくとも6週間継続する原因不明の関節炎である．近年その治療はMTXや生物学的製剤を使用するため小児科が主となっている．そのため整形外科医は関節痛にて受診した患者においてJIAを疑い，小児科へ紹介することが重要である．今回我々は関節痛にて当科を受診し，JIAと診断した2例を経験し，文献的考察を加え報告する．

12．脳性麻痺の尖足に対する腓腹筋腱延長

愛知県青い鳥医療福祉センター整形外科
○栗田和洋・岡川敏郎

当科では脳性麻痺児の下肢関節変形・亜脱臼等に対して多部位同時軟部解離術を主に行っている．その際尖足に対して以前は腓腹筋後退術を行っていたが，後退量の調節が困難であり，平成21年より腓腹筋腱のフラクショナル延長を中心に行っている．これまで24名42足に対して本法を行った．術後の経過について報告する．

13．二分脊椎症における踵足変形に対する手術例の検討

愛知県心身障害者コロニー中央病院整形外科
○野上　健・伊藤弘紀・古橋範雄
名古屋大学リハビリテーション科　門野　泉

二分脊椎症に起因する踵足変形の治療のため，当院にて1981年以降，前脛骨筋後方移行術もしくは前脛骨筋延長術と，アキレス腱固定術を併用して施行し，術後5年以上経過観察し得た症例は7例9足であった．手術時年齢は平均10歳3か月(5歳5か月～14歳1か月)，術後経過観察期間平均12年0か月(6年8か月～15年8か月)である．今回，これらの症例の長期成績につき検討した．

14．小児白血病治療後の低身長に対して両下腿骨延長術を行った1例

あいち小児保健医療総合センター整形外科
○岩田浩志・北小路隆彦・服部　義
長谷川　幸

小児悪性腫瘍治療後の晩期合併症として成長障害による低身長の報告があり，治療後も長期に亘り医学的な関与が必要である．本児は1歳6か月時に急性骨髄性白血病を発症し，2歳9か月時に骨髄移植，放射線療法を受けている．13歳2か月の時点で身長143.4 cm(−1.77 SD)．放射線療法による早期成長停止により最終身長145 cmと予想され，両下腿骨延長術を施行．Healing index (HI)は右：42.3，左：49.5と長期化したが，最終的に65 mmの延長が可能であった．

日整会教育研修講演　　座長：星野裕信

「小児骨髄炎の最新治療」

千葉県こども病院整形外科部長　西須　孝先生

※日整会専門医資格継続単位(認定単位：1単位)
(認定内容：N-03 小児整形外科疾患)
(認定番号：12-2984)